寛永諸家譜

藤原氏癸廿五冊之内十六

支流

129

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (129)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

小堀　小林

大橋

寛永諸家系図傳

藤原氏　參十六

支流

小堀

浅草文庫

光道

左近將監

山城國郡小堀の邑を領して

岩光

彩巖五　後ハ勘監と号して
生國と云ハれず

亜降

義廣府　生國と云ハるべ

亜房

宗沢郎　生國とハれず

正房

宗沢郎　後ハ勘中左衛と号して
生國と云ハるべ

正沢

彩勝　生國と云ハるべ
母ハ義井彩房ともあ

当長五年ゟ始メられ
東照大権現ゟ御領
被仰付候
同年来地一万五千石ト御
領中ハ国務ト つ被仰付
ト御ゟ被仰付
ゟて大久保石見守板倉伊賀守
ト御ゟ被仰付
〜毎事連判を以
同六年伏見城の御修復奉行ト
仰付
同七年 作ト御ゟ被仰付
ゟ江戸中検地の事ト被仰付
同八年 作ゟ被仰付 備前国の
制法ト被仰付
同九年江戸ゟ来ル
同年二月二十九日六十五歳ニ
死ス 法名道春

改一

従四位下　東大寺　生国上野

毋母儀野州波守うしなひ

寿永九年　父西沢死して後めさ

まつる

大炊頭つかさ　西沢が

食邑一万五千石の内一万三千石

を改一こと二千石に改一が

第西行西春こと　法眼と

同十一年　作をうけ屋ちらく

院御所の御修事をつとむ

同十二年　作りちらく後府城の

御修支奉行をつとめ

同年　従五位下に叙し東大寺

任ず

同十七年　勅命にて尾刑

名古屋の城天守修事を行ひ
けるし
同十八年　作らせられ　禁中
の御修事をしけるを
同十九年大坂御陣いらい大坂の云
禁中小池事〳〵和州郡山へ使を
しるかるらるる改一作を
うけ給ら那山へ發向備
事を御法を改る

大御所御お馬の前を雪郡山を御信
ていら彼地の事を　上洛て
を　殿下より
ら業慶山へ御陣とうつる
き改一命をかうむる信長
のこらず御ちひの事を
相ら此地へ居る事二三日
ならこをはめられて業慶山へ
ア　殿下おあらて軍事を

とむ

元和元年大坂再陣の時伊達政宗
政一まさ作とうけ申候ハ別
那山ハ和とむ逆ハの事有
く志と大坂へ通せ申候
これをもつてべしとゝ則
伊達馬と仕候ハ那山ハ頂那
いら詰ハ五月廿日
士の組ハくはゆ大坂城

敵陣のとき
大控現の法ハ別京都二條
の城ハいらぬ
同年 叡命とうけ申候
和別宮多の城と別
同二年
大控現堯御の法
名護屋敵ハ
同二年 名命とかハ伏見の城

御本丸御書院の御番をつとむ
同年 仰せられて河内国乃知
行をたまはる
同年 鈞命をうけたまはりて播
州姫路におもむき政務を沙汰して
同四年女御の御作事をうけたまは
りてこれをつとむ
同五年頼宣卿紀州に封せらる
とき政一 仰せをうけたまはりて紀州に
おもむきて国務をとりおこなふ
同六年七月大坂御城の外曲輪并
櫓の御作事等のまつりをさだめ
翌年の冬にいたりて功をおさむる
同七年 台命をうけたまはり
丹州福知におもむきて政事
を沙汰して
同八年 仰せにより近江国
のまもりとなる [illegible?]

同九年　作りうらく城内伏見
の町をひらかる
同年　作りうらく大坂法花
九條法殿の作事をけるむ
寛永元年九月　作とうけ海
うら二條法深乗小行幸法殿の法
作事をけるる同二年六月了
いうらく功ありぬ
同年九月廿二條法博小　行幸

有り時改一升伊掃部頭也者ハ
ないるべく　立ち法腊の事とけう
法ち法是ちまけき改一　名命と承
て後　行幸ハ寺物主宮の諸具と
くのふ　三条幸ハ後ハ諸具とうふ
ぐく　禁中ハ賜ハ時改一又作
とうけ海ちこ事と拾く未門
ち国　行幸ハ法殿と　禁裏了
拾進せ海時と又事行と動

同四年十一月ゟ　鉛冷とうけ
さしゐらして仙洞　國母の御供事
ゟ行とつゝ今聖ゟ十二月ゟしら
て切とけらゝ
同五年九月ゟ　作ゟらく
二條御城ニ花ゟ御供事ゟ行と
同ゟ聖ゟ六月ゟ花と
同六年　命ゟ　ゟらく
花御庭泉水乃音請とつゝむる

ゟ
将軍家ゟ　ゟ　黄金
千ゟとたまふ
同九年
右院殿御の時御遺物ゟて
黄金二百ゟとさしゐらゝ
同年
将軍家の御をうけさしゐらく
播州明石竜野ゟとゟまて

政治をゆだねて

同十年七月　右命をうけ普請

をもつて翌年六月ようやくおはつて

江戸城の出来普請ならびに同

伊豆の出来普請等ハ二條城出来

出来数寄屋等ハ作事奉行と勤

同十一年

将軍家御入洛の時洛中町人ハ

銀子五千貫目ヒとらせたまふ

政一　作ヒとうけ普請ならびこれと

支配ヒて　町数一千四百三十八町　家数三万七千八十軒人

同年　勅命ヒうけ　五畿内

の新治をあげられきて

同十二年　作ヒうけ京川林

の中ヒて出来普請とかまふ

将軍家御ヒて　渡御ヒて普請

とき御出来とおもふこヒにとりて政一

清拙の墨蹟ヒとあるヒて

同十六年　位をうけ申候ては
播州姫路へ　改務と仰せ
同十七年十月　作とうけ申候ら
十九年八月ては　いろいろ辞
仰遠慮仕事　仰られぬ又九月ら
彩院の御位事　等乃まいと
仰とも

正行

次右衛門　生国伯馬

寛永五年父正次なくなれしゝく
めされゝく

大猷院様へ仕へ奉る

元和元年八月三十三歳にて死

正春

左馬助　生国山城

寛永十六年へ召出され

台徳院殿へ御渡しなされ

将軍家へ仕へ奉る

正十

九郎兵衛尉　生國山城

元和二年八月

右徳院殿ゟ御遺物ゟ父西行ゟ遺

跡とたまはる

同五年四月御書院番ゟつとむ

改代

彦右衛尉　生國駿河

寛永七年

右徳院殿ゟ御遺物ゟ

同八年御小姓組の番ゟ勤

改可

二郎兵衛尉　生國武蔵

寛永十一年

将軍家ゟ御礼ゟ

同十二年御小姓組の番ゟ勤

正之

大膳亮 源別伏見にて生る

寛永六年巳之十歳の時さだめて

台徳院殿

将軍家と有るべし

家紋 丸の内小卍

先祖を尋ねし處 藤原なり 藤よ

りてこれをあらむ

国立公文書館
National Archives of Japan

小林

重時

平左衛尉　生国参河
伝忠左　清康君ヲ始奉る
并同下合戦のとき敵軍五百騎
の中ヨリ矢を能とゝ射る者五
人ならん味方是侍の士百

時のうちに錦を飾りて二十
人ばかり重時と共に浦一郡にて軍功
あり
七十二歳にして死す

重次

平左衛尉　生国同前
伝忠を　清康君に仕へ吉岡
の邑にて合戦に次と討つ

重正

平左衛尉　生国同前
廣忠卿に仕へ
き高名を得たり　清康君より
安祥古井村にて重忠と
討ちたり　廣忠卿に仕へ
永禄二年七月十日に死す
六十八　法名道林

重忠

平左衛尉　生国同前
廣忠卿に仕へ

天文十八年後刑の大和叅刑の
長と成て安祥乃城を攻る
事ありしに三ならでとり二九
とやぶりて城を統せしきて
京西あひさひ高名ならす
こうにとひく
東照大猷院様三刑て
せられし織田弾正忠信長
りかへるる事よりなりぬこの

軍功ありし安祥古井村て
とひく領地とはへ
上野合戦のとき味方敗北して
いへども京西門前京を門前
とたて三ならでは此度戦
とかりあるひる夫て
其鑓身ありしかとは是と
ぬきけるに鉄炮てあらて
其也多とぬるといへとを

なりぬ

大橋現冬刀にて切まくるき
陣中の使番とつとめ
寛永六年七月二十四日江戸にて
とゝ〳〵元七十八歳 法名林

右勝

鳴戸郎 生国とくしまの
大橋現にて使へ〳〵まいる
冬刀中野原合戦のとき

右駕の前にて〳〵みとまりへ
相戦〳〵疵をかうむり終に敵
の為に行脱とうちおとされる
しけなくも
大橋現醫師より為にて剣を療
せしめ平癒
元和四年九十一歳にて死す
法名道清

重忠

十兵衛　生國日向

大炊殿

右法院殿

将軍家へ仕へ奉る

重次

十兵衛　生國豊後

重勝

将軍家へ仕へ奉る

尼沢兵衛　生國参河

慶長十一年

大炊殿へ召寄せ奉る

右法院殿へ仕へ奉る

同十九年大坂陣のとき

伏見の城を守り

望年再陣ニ仕候
元和二年後河大納言忠長卿ヨ
リ
寛永十年忠長卿薨じ候ノち
弁ニ河内守ニ成申候
同十二年ニ召出され
将軍家ニ仕候ヘ共ニ成申候

重信

宗弥
寛永十八年二月
将軍家ニ召出され申候

某
甚助

重直
稙大夫　生国参河　法号宗廣
大稙現ニ仕候ヘ共ニ成申候

を作る

小場合戦て軍引きたるに時忠と
つゝ高名をもるゝ
叡別当吉一橋のとき重忠軍
沢郎右衛門松平豊物二人ともて
戦功あらたにもとゝ
ゝるゆゑは小林掃部助ごとき
強兵をすぐひなる
意別当川の堀と攻とき城下て

いりて相手かひ剣をうつる
永禄十一年三月二十七日堀川合
戦のとき先て切る
の疵ゆゑ疵ずいへども
大権現の御馬の前てをく戦
死と時て二十六歳
死せんとする時常ともこの服
指をゆ多中務大輔忠勝てあるゆ
主婦男西沢て是とかへし

行忠

正吉

十六歳　生國と一にて

大檀那にてはべりてまいらする

玉正四年高天神合戦の時供

ひとしいらむ

同十二年長久手合戦のとき

首二とりたるものなり

右遠藤敏

将軍家にてはべりまいらする

寛永十四年正月十二日七十七

家内にて死去

法名浄林

信吉

三郎右衛門尉　生國武蔵

重勝

右遠藤左郎　生國同前

重成

長慶院　生岡參河

大猷院様へ御ぶくまつられ

のち　御作りなられて紀伊大納言

頼宣卿へつかふ

寛永十五年八月晦日　七十二歳

かしらをそりて　法名清雲

重信

吉十郎　生岡四郎

将軍家へ御ぶくまつる

直次

長五郎　生岡武蔵

寛永十四年

台徳院へ御ぶくまつられ

のち

将軍家へつかへまつる

正英

信濃守

生田図書

寛永十一年

将軍家ニ謁シ奉テ帰ル

同十七年御書院番ニ勤ム

正定

長吉

生田武義

正忠

将軍家ニ仕ヘ奉ル

早逝

生田参河

大坂陣ニ従ヒ奉テ戦死

五十五歳ヲ以テ死ス

正信

左兵衛

右院殿ニ仕ヘ奉ル

義沢

若狭守　生国武蔵

正沢

平左衛門尉　又勝助と号して

生国参河

童丸こしを法なしなくゝ子と法寛

号童丸が子童丸ゝ分なり

永禄七年

大猷院の御小姓となりて仕へ奉り

同十二年甚川の城をせむるとき

味方一人疵をかうむり手負はんとて敵軍より鉄炮をうち

手負ひたるものゝ跡へ下がる

負とゝりけるとなり

正沢立家之道とゝなり

御番中務大輔是をゝし

天正三年五月小山と世しる時正
沢二十七歳ゆゑ酒井左衛尉
忠次て原しゝ先登と戸田左
こうしを見くほし
同四年高天神てとゝ〻ゝ籠
下の高名とゝ〻ゝ
同七年諏訪原てをもくも又
高名と
同八年丹呂城攻のとき味方

十餘騎かくすみゝ鴻田の宿て
入ちゝれとも味方あひてかゝて敵兵
殺て陣とゝ〻ゝ兵四五百騎と
しゝ〻ゝ陣机をかゝんとまた
ゝゝたゝひてすゝ面ゝてて
とゝ〻ゝ味方十餘騎井呂川と
わたりてたゝかんとゝ敵こうしと見
て百騎ゝゝ川の色て競来る
西沢大久保沢右馬中根源沢郎と

ゆもて書をかへして敗北せざる
をもて渡辺河内守脇池水脇戸田
豊前等を又ともせきとめ此時山
法師指物一本あり敵こゝかと思く
伏兵有とうたがひ川をわたさ
ずして三方ともきぬ正沢山法
師いらてみまは大塩又四郎此所
五く謂ふ所なく敗北
てゝ此所へ
我仙ホ

来とまりたりとゝ
同十二年長久寺合戦のとき
正沢ともくみ山の侍ゝいら
羽黒ゝ金紋の旗ゝ立る
勇士とゝもとゝへゝおゝかひ
組討ゝて其首とゝ
山口治ゝ出原田左兵衛尉
正沢ゝ勇力とゝ
天正十八年小田原陣の時井伊

会部が畑左衛門とせしが
とき西沢こせきこら敵長小旗元と称
と鑓とつけ出せ出でぐひて底を
かつぎ鑓とつきこら一揆
土ちどきに敵ぬときよ北畑
ぐ武人堀へ落ち敵人まとふ
ちてこれを西沢主家こまと
きまく松崎五八郎 孫原沢右衛門
西沢が戦功と見て西沢ならば

西沢きこ人鬼ならとふ形
どと西沢軍法とそむきてこせ
めぐれ堀へ飛せこらべらと思世
大指現の法家人法師へ飛とゆる
されこちらぬき居て高はれて
右法院殿下法人こもりけ甲
法鑓をなとしる
元和六年九月二十八日七十二歳
して死と 法名道光

正直

勝助　生国肥前

十二歳のときより後府をへて

右法院殿ゝ仕へたまふ後

将軍家ゝつかへける

元和九年伊予の侍従をつとめ

うせられ裏門の番をいとむ

正云

年二歳

元和八年

右法院殿

将軍家ゝつかへたまふ

正忠

後右衛門尉

寛永十八年卒

将軍家より賜はる

正清

孫二二郎

家紋　上杉の蝶二連

宗次

右衛門尉　生国武蔵

大控現

右徳院殿

将軍家より歴仕しまつる

寛永十八年八月朔日より死て

歳六十五

宗重

右郎助　生国武蔵

右徳院殿

将軍家より仕へ奉る

信勝

金右衛門　生田後河

寛永九年

将軍家へつかへたまふる

正安

左郎右衛門

宗信

左郎八郎　生田武義

寛永十一年

将軍家へ御目見仕る

同十五年より大御番を勤

正重

角右衛門　生田意江

大御視

右徒院殿

将軍家へ仕へたまふる

其年十月へ死去

正勝
猪十郎
生国後河
将軍家へ仕へたてまつる

正武
兵庫頭
生国武蔵
将軍家へつかへたてまつる

忠重

正吉
兵庫頭
生国因幡

猪之助
生国参河
慶長五年関原陣に討死
[illegible]
大猪現へ仕へたてまつる
同十年
台徳院殿へ仕へたてまつる
同十四年粮米となりて大御書

とけ申
元和九年
将軍家てゝ江戸へ入てまつる日辛
浅入浅の供奉と河内屋敷
書とゝ浅事なつ
寛永九年浅幕奉行ゝ
同十一年又浅入浅の供奉と勤
同十四年浅長門乃書頭ゝ

正綱

平十郎　生国武蔵
元和九年より発ゝ
将軍家てゝ謁申てまつる
寛永四年より大れ書とつ申

正村

右同　生国参河
右浅院殿てゝつ申てまつる

元和二年忠長卿ヲ屠て
寛永三年二月二十四日三十九歳
ヲ以て死す

正生

右大臣　生国武蔵
寛永十一年
将軍家ヲ供たてまつる

正信

父右大臣　生国参河
右近院殿
将軍家ヲ供たてまつる

宗親

兵右　生国武蔵
将軍家ヲ供たてまつる

家俊　園の中に上羽の蝶一

国立公文書館
National Archives of Japan

小林

貞俊

彩平　生國參河

清康君ノ使ヒ

貞正

彩平　後ニ郎左衛門ト号ス

生國冨前
清康君ニつかまり山中村
岡村の西ハ[illegible]
天文十五年九月二百參加上野
合戦のとき討死　法名海林

重正
彦平　後ハ尤蔦と号し
生國　冨前

東照大權現ニ仕へ[illegible]
寛永六年五月朔日九十六歳ニ
[illegible]　法名浄子

政次
加右衛門　生國冨前
大權現
台徳院殿ニ仕へ[illegible]

正次

又三郎　生國同前
長崎三郎　伝兵衛と云つる
冬別　牧に而
法名定空

政成

右左衛門　生國武蔵
将軍家に仕へ奉る

正弘

加兵衛
寛永九年八月十九日
将軍家に渇仕奉る

重宣

権平　生國同所
大権現

右浅院殿
将軍家より御へとゝ
正重
忠右衛門　生国参河
寛永十五年
大猷院様御代
村岡村の領地を
賜る

正俊
平助　生国武蔵
寛永十年
右浅院殿より御へとゝ
同九年
将軍家より御へとゝ

重氏（しげうじ）

八兵衛

将軍家へ仕へさせ申

家役　丸の内（まるのうち）上羽蝶（あげはちょう）

小林

重正

与右衛門　生國信濃

芦田下野守殿

重吉

理右衛門　生國同所

芦田修理大夫なるべし右馬大夫
ゝ仕ふ
東照大権現甲州新府ゝ出馬の
のとき見澤山乃城ゝ籠り
忠義をしめしたる故へ
ゝ関原陣ゝ従ひ
寛永十六年六月二日八十二
歳ゝて死す　法名弘徳

重沢
理右衛門　生国同所
大坂冬の陣ゝ
台徳院殿ゝ従ひ
将軍家ゝ仕へ
家役　遠奉

国立公文書館
National Archives of Japan

小林

家譜

民部　生國近江

平氏秀吉及秀頼ニ仕ル

寛永十七年八月十日八十二歳ニ

而死ス

元長

多兵衛　生國河内

寿長十五より出家

東照大権現へ御入被成候

大坂両度の御陣へ御供仕

ときに京都大佛の色々をひて元長

野間金三郎と大野道犬とを

ともに二條の御城へ敵とせめ

元昌

多兵衛　生國武蔵

寛永九年より出家

将軍家へ御入被成候

右御院殿

将軍家へ御入被成候

寛永二年四月廿大坂御書と

つとめる時六十歳にて病死

家紋

国立公文書館
National Archives of Japan

大檜

親俊

海老巫　生國參河

東照大權現ゟ御さ[illegible]

親勝

長右衛門尉　越後守　生國同所

大猷院殿へさしたまふる

天正十九年興別九郎陣有

經長と号す

文禄元年朝鮮陣のとき肥前

國名護屋にて

慶長五年

右濃院殿へ三ぐひさしたまふる

吉田にて

同十九年大坂御陣にて經長

慶長

四年大坂再陣のとき阿部

備中守正次組にて

ちらす

と申す

元和九年

作にて

東福門院へ

さしたまふる

寛永二年

五位下に叙し

越後守に

任ず

同八年九月十九日に

卒す

六十六歳

親善

五左馬尉はじめて名を言馬

生國相模

右法院殿へ仕へたてまつる

元和元年大坂陣の時親善

十六歳にて供奉とゝめ

高名と仰られ

同九年

将軍家へ仕へたてまつる

同十六年　御下りなく

千代姫君へ仕へまつる

親宗

与惣右馬尉

生國武蔵

寛永七年

将軍家へつかへたてまつる

家役　九の門よこ書院

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan